

石の唄



文 鈴木柯葉 かよう
画 いとう良一

あなたと最後に会った日は、

雪が降っていて、

しんと静まり返った駅までの道を、

交わす言葉もなく歩いたのでしたね。



もう半年経つんだなあ。

あれから、

あなたの声をきいていません。

今日、鎌倉へ行ってきました。



わたしね、学生の頃から、

なにか心に迷いがあったり、

自分が情けない奴になったりしてゐるなあって思ったら、

長谷寺の観音様に会いに行くことになっています。

あの大きな観音様の下に立って、

じーつと顔を見つめるの。

眼をそらさないぞって。

でも、観音様の眼はするどくて、

わたしの心を見透かしているみたいで……。

だから、

まっすぐ生きてないなって時は、

どうしても眼をそらしてしまう。

で、ああ、だめだ、

わたし、だめだなんて思うのよね。

江ノ電に乗りました。

日曜日だったから、

親子連れや若いカップル、

お年寄りのグループで、

車内は混んでいました。

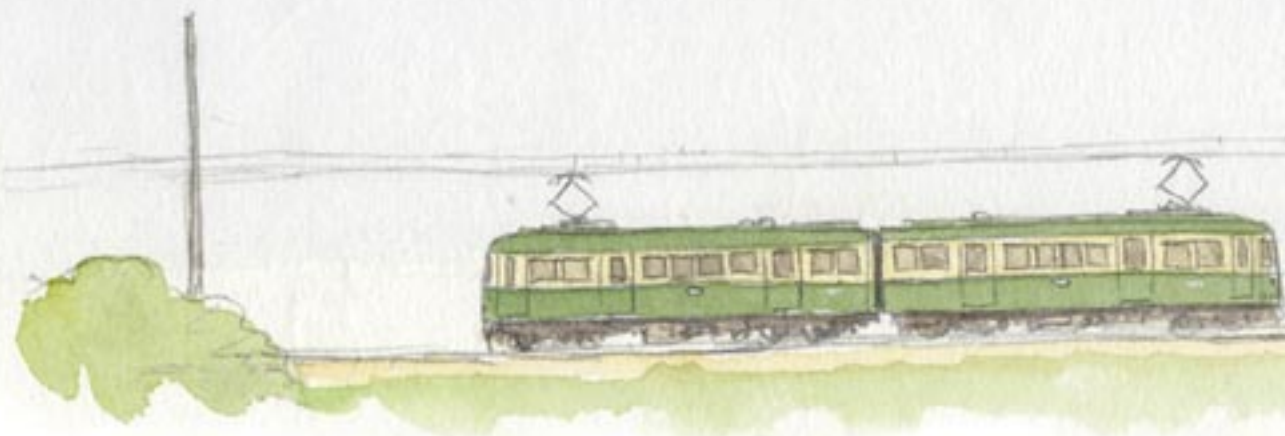
わたしはつり革につかまって、

窓の外のはなみずきやら、

もくれんやら、

まだ緑の堅そうなつぼみを蓄えた

あじさいやらに目をやっていました。



すると、わたしの下のほうで、

なにかが鈍い光を放っているのに気づきました。

わたしの前には、

初老の男性が座っています。


他の乗客たちは、

一見して観光だとわかるラフな格好をしているのに、

彼は、半そでのシャツにネクタイをしめ、

網棚には、たぶん彼のものなのでしょう、

背広の上着が無造作に乗せられています。



光っているのは、

彼の左腕でした。

おそらく、

プラスチックのような樹脂で

できているのではないかな。

反対側の窓から

射し込んでくる西日が、

彼の左腕を照らし

ささやかな光沢をもっていました。

体毛こそないものの、

肌のしみ、骨の隆起、くぼみ、

血管の青が精巧に施されています。

彼は、新聞を読んでいた。

不自由な左腕と足で新聞をはさむようにして。

右手で、じゃばら折りにたたんだ新聞のページをあやつり、時折、パンパンとかたちを整えながら、とても熱心に。

ちよつと身体を左に傾けて新聞を読む姿は、まるで、

なにかを深く思索している人のように見えました。

もうすぐ長谷の駅に着く頃、

彼はゆっくり立ち上がりました。

わたしはとうさに、網棚の背広をとって、

彼に渡しました。

彼は、わたしの眼をのぞき込むように見つめると、やわらかくて、おだやかな笑みを浮かべました。

それから、礼をいうと、降りていきます。

わたしもあわてて降りました。

改札をでると、

彼は海のほうへ向かいます。

わたしの足は、

彼の行くほうへと向いていました。

こんな行動をするなんて

わたしらしくないって、

あなたはいうかもしれないけど、

その時は、そうすることが、

とても自然なことのように

思えたのです。



海はおだやかでした。

夏の手前で、まだ人も少なく、

沖では、ウインドサーフィンの三角の白い帆が、
波の動きにあわせてダンスしています。

遠くには、江ノ島がかすんでいます。

彼は防波堤に腰掛けました。

わたしも、彼からちよつとだけはなれた所に
座りました。

わたしの後ろを、

風鈴売りの屋合がゆっくりと、

涼しげな音を残して、通り過ぎていきます。

うばさんへおはよう、

彼は右腕を地面についで、

ひょいっと浜に降り、なにやら探し始めました。

わたしも浜に降りました。

きくと、彼は、

わたしが彼のあとをついてきたことと、

気がついていいるのだろうかと思っただけど、

もう、そんなことと、

どうでもよかったから。



彼は石を拾っています。

大きさはいろいろだけど、

どれも、穴があいています。

五、六個あいているものもあるし、

ひとつしかあいてないものもありました。

片手に持てるだけの石を集めると、

彼は新聞を広げ、石をならべました。

そして、ひとつひとつ手にはしては、

夕日にかかげ、吟味するように丹念に見比べると、

そのなかのひとつを手にとりました。

それから、石に、そつと唇をあてます。

まるで、眠っている小さな子のおでこに

□づけるみたい。

すると、海からの風にのって、
なんとも素朴な音が

きこえてきたのです。

オカリナみたいな音、

あたたかくて、

まるくて、

素直に心に届く音。

でも、哀しげで、淋しげで、

失ったものをしのぶような音でした。



わたしは、

あなたの声を思い出しました。


あなたの声は、

ゆらゆらとゆれるやなぎのよういたおやかで、

それでいて、

チューニングのずれたギターのような

ギンギンとした音をもっていた。



ああ、あなたの声が聴きたいな。

そう思ったなら、涙がでました。

涙がぽたぽたと落ち、

砂の色を変えていきます。

わたしは、足元の白い貝殻を拾いました。

波に削られて小さくなった貝殻のかげらは、

昼の太陽の熱を少しだけ残し、

まだ暖かかった。

わたしは、それを、ハンカチで包み、

そつと、ポケットのなかにしまいました。

海は凧のときを迎えようとしています。
なぎ

